

ホタルと共生する一の坂川

業務部主事 照井 治子

毎年5月も終りに近づくと夕闇の中に仄かな光が舞い始める。山口市の一の坂川での光景だ。“ホタル護岸”によって多自然型川づくりのいわば先駆けとなり、昭和62年には建設省の手づくり郷土賞を受賞。6月には「ホタル祭り」が開かれ県内外からの大勢の観光客で賑わうこの川をたずねてみた。

本州の西端、山口県のほぼ中央に位置する山口市は今から600年ほど前に大内弘世の時代に京都を模して町が作られ今もその面影が残る。古い神社や寺・文化財等が多く、歴史を感じさせる佇まいの家々が並ぶ。そして山口盆地の北西には秋吉台国定公園の草原がひろがり、あちこちに白い石灰岩が群れをなしている。

一の坂川は樫野川の支流として市の中心を南北に流れ、先の大内氏の時代に京から迎えた姫の郷愁を慰めるために放流したという伝説があり、天然記念物のゲンジボタルが生息している。一方、この川は治水安全度が低いため、下流から河川改修が実施されていたが、ホタルの保護を訴える人々の反対によりいき詰まっていた。しかし昭和46年8月の台風19号により護岸は全て崩れ、周辺民家は1mの床上浸水を被る被害を受けたことにより、治水対策の急務は地元の人々にも認識されるところとなった。このため治水とホタルが棲める環境と同時に満たそうとする“ホタル護岸”が計画され、翌47年に工事が開始された。

当時の山口県河川課の係長だった伊藤さんはこう語ってくれた。「環境が元に戻るかどうかが一番心配でした。やはり自然というものはどうしても人の頭で考えた通りのものが戻ってこない。ホタルの環境に合ったものをどこまで出来るかということですね。」ホタルの棲む環境は実に多くの条件を必要とする。それだけ自然回復時の予測も難しい。

また当時は高度成長期で少しでも工事費を安くという時代。こんなエピソードもある。「護岸には萩の笠山の石を使いました。市内で採れる石より、この火山岩のほうが中に気泡があって水分が残りがけが沢山付くんですよ。会計検査院の調査官にまあ、ホタルに礼を言っとくだね。と言われました。3割から4割は高くなって…。(笑)」

ホタル護岸工事は49年に完了、8年後には一の坂川の上流に治水ダムも完成し洪水に対する安全性は一層向上した。

川が街中を流れるため幅は広げられないので、もっと水を流すために川底を掘る。

新しくなった一の坂川には、取り除かれてしまったホタ

ルの幼虫の餌であるカワニナとホタルの幼虫が放流されたが、ホタルが息づくまでには約10年待たなければならなかった。幼虫の放流は県の農業試験場に続き自然教育の一貫として近くの大殿小学校、そして今はふるさと伝承総合センターの大殿ホタルを守る会に受け継がれている。

ここには井戸水が沸き、湿度が高く夏でも涼しい絶好の土蔵がある。このなかでセンターの濱屋さんは様々な工夫を凝らしながらホタルの飼育に取り組んでいる。

「問題は、幼虫の大きさなんですよ。何万匹放流したといってもそれはふ化した時の数で、歩留まりが良くないと。放流をやめればホタルは減るのかということは私には判りません。数を減らさないことよりも、これを通じて子供や大人にも関心を持ってもらうことが大切なんだと思います。」

工事の完了後、多くの人の手によって餌と幼虫とを放流しなければ元の自然環境には戻らなかった一の坂川。確かに単なるコンクリートブロックで固めた護岸とはまったく異なった自然豊かな川縁である。しかし“ホタル護岸”であり続けるには2mm～4mmの小さな餌を採り、主役たるホタルの幼虫を育て、川を清掃といった地道な作業が必要なのだ。人々がその関心を寄せる限り、ホタルは爽やかな初夏の夜の闇を灯し続けるだろう。



一の坂川を上流方向へ望む



ゲンジボタル発生地の記念碑